2020 April　春　Vol.16

会報 安曇人

安曇誕生の系譜を探る会

CONTENTS

1　最寄りの神社の祭神事情・・・・・丸山祐之
2　大妻神社と大妻兼澄・・・・・・・岩淵軍平
3～9　安曇族はいなかった？　・・・・刈間健志
10～11　歴史は変わる！(5)　・・・・・池田義光
12　編集後記　・・・・・・・・・・・本郷敏行

発行：安曇誕生の系譜を探る会　発行責任者　：丸山祐之
編集委員長:本郷敏行　　事務局長：川﨑克之
〒399-7102 安曇野市明科中川手1177－3　☎090-5779-5058

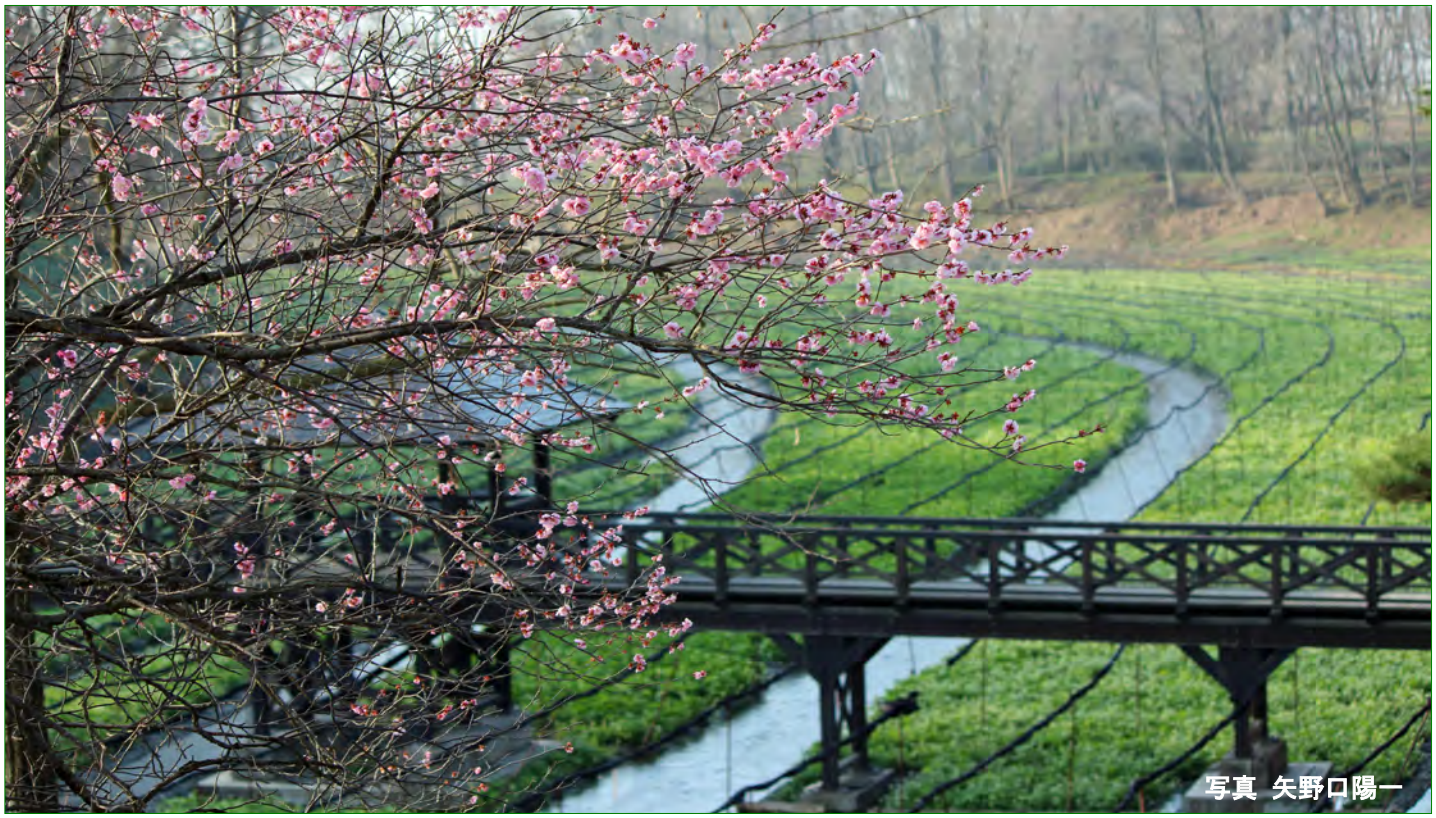

写真 矢野口陽一

最寄りの神社の祭神事情　　会長　丸山祐之

私の住んでいる地区にある神社は洲波神社といい、祭神は建御名方命と事代主命です。これらの神さまは古事記に語られている神話の中の「出雲の国譲り」で有名な二柱です。天照大御神が葦原の中つ国（地上界）を征服する過程で登場する神さまで、大国主神の息子たちです。兄の事代主命は何の抵抗もせずに逃げてしまうし、弟の建御名方命は相手と戦うもあえなく敗退してしまうという負け組神さまです。この負け組の二神が何故洲波神社の祭神で産土神と共にこの地区の守り神であるのかあまり深く考えずにいました。この件に関し、今年一月安曇野市郷土博物館「こたつ講座」でのお話や同タイミングで出版された著作から知見を得ることができました。どうやら建御名方は長い年月を経て、京都や諏訪の地で支持者達の後押しもあり、大変身をとげ諏訪大明神になられたようです。以前、会報で諏訪大社における建御名方について触れたことがありますが、我が地区の神社の祭神となったのは比較的新しいのではないかと思います。基本は産土神ですが、建御名方が諏訪で大変身・大出世して、大社の大明神（軍神）となられ、格が上がった後に、あるタイミングで洲波神社の祭神として勧請されたのではと、想像に難くないのですが調べてみたいと思います。建御名方と事代主を祭神としている諏訪社は全国的に多いようですが、皆さんの地域の諏訪社はどうでしょうか。

もう一つ、私の地区には玄蕃稲荷神社があり、祭神は宇迦之御魂神で全国的に大人気の神さまです。その起源は建保元年（1213年）に鎌倉幕府の御家人であった小笠原民部大輔長忠（信濃守）の一族である安曇玄蕃頭が祭祀したのが始まりとのことです。小さなほこらとして残された時代もあったとのことですが、前述の祭神もある時期に勧請されたものと思います。過去にどのような歴史的変遷があったのか、また無かったのか。また余談ですが、１３世紀の安曇さんはどのような人物だったのでしょうか、興味が湧いてきます。

大妻神社と大妻兼澄

梓川　岩淵軍平

松本市梓川倭にある大妻は往古南大妻と北大妻から成る一つであり、大妻南方、大妻北方と呼ばれていた。南方には弁天社（厳島社）があった。大妻神社は創立年月日不祥であるが、南大妻村の産土神であり、祭神として建御名方命と大妻兼澄を祀ってある。明治5年11月に村社となる。社伝によれば1185年頃ここに居館を構えた大妻氏が祖神である諏訪社の「建御名方富の神」を勧請して、大妻南方の産土神として崇敬した。便宜上いつからか上大妻、下大妻の呼称もつかわれていた。

野々宮神社

江戸中期宝暦5年ご本殿立替の棟札の写しに大妻大明神とあるから最初はそう呼ばれていた。

明治9年の「長野県町村誌」の中の「倭村誌」の記述中に大妻社は「祭神建御名方富命と承久の頃の土豪大妻兼澄の霊を合祀す」とある。昭和21年、維新以来大妻社と尊称してきたのを「大妻神社」と改称した。

さて、祭神である大妻兼澄とはどのような人であろうか。大妻兼澄は通称を小太郎という。安曇郡住吉庄の住人である。大妻氏は諏訪神家の一党である。諏訪大祝の元祖を有員と云い、15代の孫を頼信と云い、頼信七代の孫を敦澄という。大妻氏は住吉庄の荘官として大妻に居館を構えて土着し、在名を以て氏としたものと思われる

旧南安曇郡の南方の一帯は住吉庄で、院の御領即ち後鳥羽上皇の御領であった。大妻氏はその庄官となり、大妻郷に居館を持った。皇室を本所とする関係上、度々京都との間を往来した。

承久3年「承久の乱」で官軍に加わって苦戦し敗れたが、兼澄の義烈を思慕するのあまり、諏訪社の傍らに小祠を建ててその忠霊を祀った。

承久の乱とは承久3年に後鳥羽上皇が鎌倉幕府の討伐を図って敗れ、かえって公家勢力が衰微、武家勢力が強盛を招いた戦乱である。乱は約1ヶ月で終わり、後鳥羽上皇は隠岐に配罪、順徳天皇は佐渡へ、土御門上皇は土佐へ配罪となる。

大妻兼澄は美濃国の大井度において大内惟信と共に戦うが重傷を受け力及ばず家臣の中野三郎兼貞、小嶋四郎と共に山中に逃げ込んだ。兼澄の末期については諸説あり、承久記及び承久軍物語には兼澄痛手を負い山中に馳せ入り「行方も不知」ということになっており、大日本史には戦死としてある。

土佐の郷土大妻氏の系図によれば兼澄は戦傷の癒えるのを待って京都に走り、後鳥羽上皇に供奉して隠岐国に至り、同国において卒去とある。

大妻兼澄は諏訪神社の末裔で大祝真澄の曾孫、父敦澄が時の天皇から守護職を命ぜられ諏訪から大妻の地に移ってきた。現在の居館跡は北大妻の地籍に「史蹟保存」。長野県として「大妻氏居館址」の碑が建てられている。

兼澄は岐阜で北條義時と奮戦したが利あらず自害している。子供は後に後鳥羽上皇の供をして隠岐の島に行き四代の後、静岡に居を移し、長曽我部氏の指南役となり長曽我部と供に土佐に赴き、山内家に身を寄せたが山内氏と豊臣秀吉が争って山内が降伏したので、大妻は切腹した。遺児は浪人となり、業を医に求め代々相続した。

大妻氏居館址

現在の大妻学院の創始者の大妻コタカは兼澄28代の孫の大妻良馬の妻である。コタカは「大妻神社」には祖先が祀られているため、良馬存命中は毎年参拝して祖先に感謝しておられる。

大妻女子大の校章は「丸に糸巻」であり、これは後鳥羽上皇から賜った兼澄の旗印だったものである。大妻家は土佐を永住の地と定め、祖先の墓も土佐にある。

旧北大妻村は倭村に合併し、倭村は梓村と合併し、**今の大字の梓川**となった。倭村の由来についてよく質問されるので紹介する。この名前は南大妻にある野々宮神社の祭神である倭姫命から採ったものである。

「・・・大日本帝国の古昔の呼称と一致し、古雅なるを以てあやかりてこれを採りて定めるなり・・・」と南安曇郡誌にある。

安曇誕生の系譜を探る会　会員募集中
入会金：無料　年会費：2000円
お問合せ：事務局　川﨑　☎090-5779-5058

安曇族はいなかった？ 「安曇族」概念のルーツとその拡大 刈間健志

安曇平に住んでいる人で「安曇族」という言葉を耳にしたことがない人などいないのではなかろうか。それほど「安曇族」は安曇平の人々にとって馴染み深い存在である。だから、ここで私が唐突に「安曇族」は歴史上存在しなかったと言ったら、とても信じてもらえないであろう。しかしこの十年余りの間、違和感だらけの安曇野の古代史と格闘し、ようやく見えてきた結論は「安曇族」など最初から存在していなかったのではないかという疑いである。

一方、安曇野の人たちが当地の歴史を語るとき、口を突いて出てくるほど「安曇族」という概念は定着しているように思われる。何故「安曇族」概念は常識化・日常化するまでの広がりを持ちえたのだろうか。

「安曇族」概念を世に広く知らしめるきっかけを作ったのは、「安曇族」概念の媒介者で、『穂高神社史』においてこの概念の性格付けを行った宮地直一博士であろう。宮地氏による「安曇族の信濃植民説」は神社関係者のみならず郡史・市町村史にも大きな影響を与えた。

弥生時代以降、信濃へそして安曇平へやってきて我々の祖先となったのはどんな人々だったのか。開発後進地の安曇平に突然安曇郡が置かれたのはなぜなのか。都から遠く離れ、史料にも乏しい地方の古代史。その空白を埋めてくれる「安曇族」概念は、郷土史家にとって誠に重宝な存在に映ったことだろう。

開国からまだ時浅い日本で、実証史学や考古学・人類学・民俗学など人文アカデミズムのほとんどの分野が創始されたばかりという状況下、内務省神社局に籍を置き、大学教授も務めた宮地博士の影響力は抜群に強力であったと思われる。『穂高神社史』を参考に博士の唱えた「安曇族」論の真の狙いについて紐解いてみたいと思う。

「安曇族」概念への素朴な疑問

『穂高神社史』で紹介されている「安曇族」の基本概念は現在も様々な論者によって引用され、様々な解釈がなされている。戦後70余年の間に考古学上の発見、技術の発展などにより様々なトピックも提供されている。しかし、殊「安曇族」論の中心的な課題に至ってはこの70年余りほとんど何の進展もない。極論すれば3つの課題、すなわち「北九州安曇族」「信濃安曇族」「宮廷貴族の安曇氏」この三課題に収束すると言ってもよい。この三者の間には空間的な隔たりがある上に時間的にも500～1000年近い隔たりがある。にもかかわらず、安曇族の民族的性格をいくつかの基準で分類し定式化しようとする試みが当初からなされてきた。空間は船を漕ぎ山を掻き分ければたどり着けないこともないが、500年1000年という時間はそう簡単に乗り越えられるものではない。20年を一世代と考えても500年で25世代、1000年で50世代。近親婚を繰り返しながら人口を増やしていったと考えても、当時数十万から二、三百万規模の西日本全体の人口すべてが先祖や子孫となる程度の世代数であることを考えると「族」という纏まりを保ち続けられたかどうか大変疑わしくなる。王家や氏上家という特定の血筋の継承を想定した場合においても、500年～1000年の間には家筋がいくつにも分岐し、主従関係も複雑となって、内紛などで絶えてしまう恐れもある。さらに言えば、志賀島のような文化交流の盛んな地域で長期にわたり数多くの政争を潜り抜け独り栄華を欲しい儘にしてきたなどとても信じがたいことである。

その一方で志賀島に海神を祀り、海部集団と周辺地域を支配下に治める奴国の長としての栄光がなかったとしたら、信濃に「安曇郡」の名がつく機会が失われてしまう、とするのが「安曇族」論のアキレス腱にもなっている。そもそも文字文化すらなかった弥生(想定によっては縄文)時代に、「安曇」の氏族名と正しい系譜をどのように継ぎ続けることができたのだろうか。分け入れば分け入るほど様々な矛盾と疑問の渦に飲み込まれしまう。この違和感はいったいどこから来るものなのだろうか。

「安曇族」概念の定義

「安曇族」の定義とその性格付けについては『穂高神社史』第一章「安曇の氏人」に纏めて紹介されている。また第二章「穂高の環境」では信濃安曇族について活動範囲や考古学に照らした知見が詳細に述べられている。一章二章に述べられた安曇族の活動圏や生活習慣、祭祀などを「安曇族」の定義、「安曇族」の具体的なプロフィールと見てよかろう。その内容を簡単に整理するとともに私なりの疑問点を挙げておきたい。

1「安曇族」とは「安曇系海神族」の略称で「安曇氏および部曲の民」を意味する?

第一章には「安曇族」という表記が11箇所あるが、その冒頭で「安曇系海神族」を「安曇氏および部曲の民」と言い換えていることから「安曇族」の意味するところが何となく伝わってくる。ここで宮地氏が強調するのは「権威者である安曇氏と部曲の民との主従関係は世襲的で、同じ信仰によって結びついた『家長制部族団体』であった」とする点である。伴造氏族への部曲の隷属は氏姓制度の始まった四、五世紀ごろを上限と考えられているが、安曇氏と部曲との世襲的関係はそれ以前にまで遡るのだろうか。全体の流れを見ると、宮地氏の想定する時代はおそらく奴国以前まで遡ってのものだと思われる。だから単純に安曇系海神族=安曇族と言い換えられない含みもあるようだ。

2「安曇族」は祖神として「綿津見神」を祭祀する

祖神とは裔孫である「安曇族」の直接の先祖、という意味である。「人格神としての血縁神観を完成し祖神対裔孫といふ信仰を具現したところに他に区別すべき特色をみせている」とし、安曇族にとって綿津見神は実在の祖先のような扱いであったらしい。明治政府の官僚であり、信仰心も篤かった宮地氏が神話上皇室に最も近い血縁の氏族をこう評することに特段の驚きはない。しかし祖神と裔孫の関係を強調することに特別の意味があるとすれば、綿津見神の実在を前提にして「安曇族」(特に安曇部と祖神との関係において)に実在感を与えることである。そもそも綿津見神を祖神とするのは記紀神代記に記された綿津見三神裔の阿曇連と新撰姓氏録に記録された安曇連、安曇宿禰を含む七氏族だけである。安曇部や海部までが綿津見神の裔孫であるとすることにはもともと限界がある。さらに押してその血縁を主張するのであれば、せいぜい初期天皇時代くらいを下限としなければ「安曇族」の存在そのものが疑わしくなってしまうだろう。下限を延長するには信仰上のリアリティーが必要なのである。

なお第一章では安曇連を地祇系「綿津見命」裔として紹介する他、天神系「天造日女命」裔として旧事記の内容を紹介している。天神系への考察はないが意図的に無視した観も否めない。

3「安曇族」は志賀島に綿津見三神を祀り、筑前国糟屋郡を本拠とする

北九州は安曇族の本拠とされ、いつの頃からかここから全国に向けて旅立ったとされる。大阪湾岸から内陸に向かった一族は大和政権の重臣となり、信濃に向かった一族は安曇郡を開拓し、諏訪大社下社にその痕跡を残したという。ところで「安曇族」が此処を本拠とした証拠は本当にあるのだろうか。

「和名抄に志珂・阿曇郷の二郷を載せている」「古史にいふ儺縣、漢史に所謂倭奴国に當り、早くより漢土と交通した」「志賀島に祀られたのが延喜式に出る志賀海神社三座である」「旧事記にも阿曇連等の斎祠る筑紫の斯香神とある」「神代記事の海神国を志賀島又は対馬の辺りに擬し、海神の発祥地をその間に求める説を生ずるに至ったのは無理のないところ」といったほとんどが時代状況や神話からの推測だけである。阿曇郷や志賀海神社の記述は平安時代のものであるが古い伝統があることは確かだろう。それにしても奴国時代にまで遡るとなれば磐井の乱や邪馬台国、倭国大乱など様々困難な時代状況との整合性を説明しなければならない。とても不可能な話である。志賀島周辺が「安曇族」の本拠だとする根拠はきわめて薄弱であると言わざるをえない。

4「安曇族」は本貫を一つにせず、全国に分散して定着した

安曇族の分布は、西日本を中心に広域に及んでいる。章内の分布リストからも同じ海人族の宗像氏などが一地域で定着しているのとは対照的に、確かに本貫と言い得る規模の郡郷に安曇部が分布しているのがわかる。しかしここでも使われている資料は奈良時代以降のものであり、畿内を除けばそのほとんどが安曇部であることに留意しなければならない。安曇氏は応神天皇期や物部大連・蘇我大臣時代、朝廷内で力を振るった時期がある。領土拡張の野心が芽生えた時期をこの頃に比定することに不都合はない。なぜなら海部郡や海部郷の数の多さに比べ安曇郡や阿曇郷の数はわずか4つに過ぎないからである。近江国阿曇郷に至ってはその所在すら不明であり、宮地氏も何の考察もしていない。吉田東伍氏(『大日本地名辞書』1907)は近江国伊香郡阿曇郷の安曇は「阿渡知と訓むべし、信州安曇郡とは全く相違す」という。確かに琵琶湖周辺に阿渡(アド)水門や安曇(アド)川はあるが、アヅミと読む地名はない。アズミからアドに変化したという説もあるが、逆のパターンにも思いを致す必要があるのではなかろうか。そもそも古代に安曇を「アヅミ」と訓んだか否かもわかっていないのだ。ちなみに阿曇郷のあったと推察される阿閉地域には「天造日女命」を祭神とする乃伎多神社がある。

また宮地氏は「アマ、アマベの氏族名や地名は何れの系統にも占有ではなく海人の汎称として使用せられた」とし、海部郡、海部郷の中にも安曇族が建てた郡郷があると言いたいようである。しかし海部が海人の汎称であると言うなら大勢力を誇った尾張氏の海部、丹波国造家の海部直氏の海部をはじめ宗像・大倭直・鰐・息長・紀・加茂・物部・吉備など安曇氏以上に強い勢力を持つ豪族の海部は限りなく存在したと思われるので、戸籍に安曇部の載る海部郡や海部郷以外を「安曇族」進出地として期待すべきではないと思われる。

5「安曇族」の定着地には安曇・阿曇の他、厚見や渥美の地名が残っている

前項に関連して、「安曇族」の進出した地域には海部や海士、安曇・阿曇、厚見・渥美などの地名が付けられたとされている。海士、海部については前項の通りだが、「アツミ(温海・熱見・厚見)アタミ(熱海・阿潭)アクミ(飽海)などの地名については国語学上の調査を待たねばならず、この点が解決つかない限り根本原由を明めることが出来ず曖昧模糊の感の伴ふを免れない」とし、渥美・厚見などについては宮地氏自身にも確信があるとは言えない様だ。それでも渥美・厚見にこだわるのは吉田東伍氏や太田亮氏など先人達に押されてのことと思われる。

6.「安曇族」には黥(刺青)や珠玉を愛好する習慣がある

安曇連浜子が謀反の罪に問われた際、黥するの刑に処せられ、これを時人が安曇目と言ったとする日本書紀の記事。そして魏志倭人伝に言う黥面文身の習慣が北九州

地方には一般的であった点から類推し「安曇族」にもまた刺青する習慣があったとしている。北九州のみならず黥面文身の習慣は東南アジアで一般的な習慣である故、上古日本の土俗文化の中でも普遍的な現象であったと思われる。仮に刺青が安曇族の文化であったとしても、200年の時間と400㎞も離れた淡路島や大阪湾岸地域の「海人の宰」との繋がりをどう捉えたらよいのだろうか。

宮地氏は他に安曇族の文化として「珠玉の愛好」に触れ次のように言う「玉を愛するは古代人に普通の習わしで、その事例の珍しくない間にあって海神族にはとくに顕著であったと察せしめる節がある。」そして豊玉姫・玉依姫の神名などを例示しているが、その説明は抽象レベルを出ていない。「とくに顕著」な習慣とはどのような習慣なのであろうか。安曇族の玉への傾倒については信濃安曇族への関心や考察より感得された可能性が高いと思われる。次章では大場磐雄博士の考古学的研究から得られた成果も強力に援用している。

(信濃安曇族の考察から)

7「安曇族」は金属器使用の先駆者であり、銅鉾・銅剣を保持した

第二章においては信濃安曇族の詳細な活動振りや遺跡状況が紹介され、安曇族の性格付けもより鮮明になされている。考古学的な調査結果はその大半を大場博士に負っていると思われ、「大場氏の意見を聴くに」と前置きしている。それによると金属器の使用、端的には銅鉾・銅剣・銅戈の分布が安曇族の行動圏と一致しており、長門・出雲・伯耆・丹後を経て越後に至る所々に発見されているという。また発見地は安曇族の移住地を辿る有力な支証であるという。

『穂高神社史』の出版と軌を一にして昭和24年『信濃』に発表された大場氏の論文「信濃国安曇族の考古学的一考察」には北安曇郡平村海ノ口鎮座上諏訪社の神宝「銅戈」が写真入りで掲載されている。尤もこの銅戈の発見地は明らかではなく、新潟方面からもたらされた可能性もあるというが、近隣からの発見であれば、信濃安曇族の重要な移住証明になるのだという。

一方、大場氏といえば、海神族と玉との特別な関係を論じた論文「玉依比売命神社の児玉石」(昭和16年)がある。折口信夫の影響を受け「玉=魂」とみなし、子持ち勾玉(児玉石)はとくにその呪力が強調されたものとみなす。さらに玉依姫の神名に関わる地名・神社の考察から、玉と海人族との結びつきを強調し、穂高神社や氷鉋斗女神社などの神社所在地、海部郷など海部系地名の存在に注目して積石塚古墳の分布と海部族の分布の一致を説いた。

宮地氏もこれに関連して「安曇族が宝玉との所縁の深い点に立脚し、之を越後の糸魚川下流小滝付近に硬玉の原産地の発見された事実に結んで、彼らの移住の原因を説かうとする試みも提起せられている」ことを紹介している。

8「安曇族」信濃への移動は北九州より長期間継続して行われた。その時期は上古に遡る

『穂高神社史』第一章において「安曇族」の存在年代はやや漠然としたものとして論じられてきた。実はこの漠然とした態度にこそ戦前の宮地博士渾身の配慮が滲んでいると私は考えている。

宮地博士は学生時代より実証史学を志したと言われるが、史学の実証性をとことん突き詰めていくと当然のことながら神話との齟齬が生まれてしまう。国家の神社行政の担当官でもある宮地氏が海神の存在年代と神武天皇の即位年代に矛盾が生じないよう配慮するのは当然の責務であろう。

ところが第二章「安曇族」の信濃入りに関しては大場磐雄博士の考古学的知見を取り込み、その年代的な位置を弥生時代以前まで確信を持って遡らせようとしているように思える。国家に遠慮することなく実証性だけを追及しようと心がわりでもしたのであろうか。第二章の最初の方で氏は次のように言う「安曇族のその諸国に移住をはじめた上限は恐らく先史時代にまで遡らせられるであらう」と。「先史時代」という言葉には神武天皇即位以前という意味も含まれているのだろうか。

それにしても第一章とのこの微妙な態度の差はいったい何を意味しているのか。『穂高神社史』の執筆は戦前から依頼を受けていたと言われているが、出版されたのは昭和24年、戦後のことである。宮地博士が原稿の執筆、推敲中に穂高で突然逝去されたため、ご家族の手により出版される運びとなった。氏の心の変遷は測り知れないが国家神道の最前線にいた方であるから、大きな体制変化に何かを感じ取られたのかも知れない。

またこのことに関連して、宮地氏は「奈良時代の昔に於いて氏族名を負う一郡の設置せられるまでには長期の準備を要し、久しい以前より郡内に勢力が養われてゐたとしなければならない。」とし、安曇族による安曇郡の開拓が「上代も古い時期」より行われたのは当然であると言う。比較的新しい時期から開拓を始めた氏族の氏族名をもって郡名に当てられた例があるにもかかわらず何ゆえこのようなことを述べられたのだろうか。誰もが首を傾げたくなるこの強気の論述に実は「安曇族」誕生に関わる真の意味が隠されていると考えたいのである。

内務省神社局と「安曇族」概念のルーツ

宮地博士は東京帝国大学文学部を卒業後、明治42年(1909)内務省神社局に神社考証官として入局。社格認定など国の神社行政の中心的役割を担った。大正11年(1922)国学院大学教授、大正13年(1924)神社局考証課長、昭和13年(1938)東京帝国大学教授を歴任。大正4年(1915)には明治神宮造営局参事として明治神宮の創建にも携わった他、昭和10年(1935)紀元2600年祝典準備委員会嘱託にもなった。昭和21年(1946)GHQ占領下、内務省解体にともなう神社処分に関わって神社本庁の創立にも立ち会っている。

研究者として官僚として、終始一貫国家神道や神社行政の中枢から日本の近代化を精神面より支え続けた人生であった。

実証研究と国家神道。科学と神話。両立し難い領域を学問的かつ政治的に融合を図って行く、その困難さは想像するに難くない。現実と神話が最前線で交錯する弥生時代の扱いをめぐっては熾烈を極めたであろう。時は弥生文化や縄文文化の発見。日本の人類学・民俗学が創始されるなど先史時代への興味の窓が開き始めた時代であった。

歴史と神話の矛盾が融和されるためには縄文晩期から弥生初期・中期の扱いがきわめて重要となる。「安曇族」誕生の鍵はそのあたりにある。しかし「安曇族」の歴史的実在性を証明することは物証の少ない時代故、状況証拠を積み上げてゆくほか術はなかったであろう。それ故、当時同僚として内務省神社局に奉職していた大場磐雄氏や太田亮氏らの研究成果を大いに活用し「安曇族」概念の強化を図ったものと考えられる。

國學院大學の中村耕作氏(平成22年　国学院大学「研究開発機構紀要」第２号所収「『古代学』としての考古学・『神道史』としての考古学」)は『穂高神社史』第二章において銅鉾・銅剣・銅戈や海人の分布を示すことで安曇族の穂高地域への移動年代や移動ルートを示し、北信地域における安曇族の移動の証拠を挙げるにあたっても大場氏の諸説を容れたことを指摘する。宮地氏の「氏族」と「神社」を結びつける文献学(実証主義)と遺跡発掘の成果を神社史に結びつける大場氏の考古学とが結合し「安曇族」概念はより強固なものになった。その際、彼らの氏族論が同じ内務省神社局にいた太田亮氏の氏族研究に多くを負っていた可能性があることも中村氏は指摘している。

『神道講座』所収「氏神の発達」(太田亮昭和4年)では全国の安曇関連地名(渥美・厚見も見える)の他、穂高神社、氷鉋斗女神社など安曇関連の神社も挙げられており、宮地氏・大場氏の研究基礎データはこれに負っていた様子が窺える。尤もさらにそのルーツを探すと、歴史学者吉田東伍氏の『大日本地名辞書』(明治40年)に行き着く。渥美・厚見地名も安曇関連と書かれているが、やはりその根拠は不明である。

「安曇族」という用語使用のルーツだけを追っていくと、宮地氏においては『諏訪史』第2巻(昭和６年)での使用が一番早い時期のものであると思われる。さらに遡ると太田亮氏が『日本古代氏族制度』(大正６年)の中で初めて「安曇族」という一節を立ててこれを説明している。この著作は大学卒業後初めて著した太田氏の事実上の処女作であり、我々の知るところでは最古の「安曇族」使用例ということになる。

この本の目次をめくると「第５編　地方制度」「第二章　酋長時代」の「第10節　安曇族」とある。「酋長時代」というのは、大和政権が誕生する前の統一されない地方政権の時代、或いは多少の侮蔑を込めて未開民族の支配した時代、その程度の意味であろう。(大正13年の著作『日本国誌資料叢書』『信濃』では酋長時代を崇神天皇以前としている)節は17あり、順に「土蜘蛛」「国栖」「佐伯」「八握脛」「蝦夷」「蝦夷人の氏姓」「熊襲」「隼人」「出雲神族」「安曇族」「山祇族」「天孫裔氏族」「天神裔氏族」「帰化族」「皇別氏族」「酋長時代の政治」「酋長の末路」と続いている。土蜘蛛から隼人まではいわゆる蛮族であり、出雲神族、安曇族、山祇族は国津神を祀る地祇裔氏族ということになる。節の並びは皇室との親和度の濃淡によって順序付けられているようだ。安曇族は神話上皇室の姻戚ではあるが、ここでは当然先住民族の末裔なのでこの位置となる。お気づきのように地祇裔氏族はすべて「○○族」で統一されている。酋長や「○○族」といった言い回しは初期の人類学で頻繁に使われ、柳田國男も使用していることから、この時代のポピュラーな言い回しであったのかも知れない。

それにしても「山祇族」(こういった人々が存在したかどうかについてはここでは触れない)に対応する概念は「海神族」のはずなのに太田氏は何故「海神」ではなく「安曇」を使ったのであろうか。このような名付けになった原因はまさに本文の説明部分にある。

「第10節　安曇族」より

安曇族は「綿津見神の子孫と伝えられる」「筑前国糟屋郡阿曇郷がその根拠地」「志賀島より徳川時代、漢倭奴国王金印が取り出された」「安曇即海神族の建てた儺国がいわゆる奴国である」

さらに前述の『氏神の発達』では「奴国王と云うのはその実が国史の安曇氏である」と明瞭に断定する。海神の子孫=安曇族=奴国王の図式が意味するのは海神族の中の海神族、海神族の王、海神の正統継承者。すなわち固有名詞の「海神族」と「安曇族」はほぼ同義なのである。一方で、こうした意味構造が「安曇族」に託されたということである。ひとたび安曇族=海神族、安曇氏が海神族の王ということになると、安曇郷は奴国の王都となり「竺紫の日向の橘の小門の阿波岐原」も「海神の宮」も志賀島周辺に擬定され、憶測が憶測を呼び「安曇族」の概念は限りなく広がって行くことになるのだが、それは後々の話である。

ところで太田氏が「安曇」という名称を選び、「海神族」の別称としたその根本原因は「阿雲郷」(和名抄高山寺本「阿曇郷」)にある。その名称は飛鳥時代から奈良時代にかけて確かに存在したであろう「安曇連」「安曇宿祢」に因んで付けられたものだ。だから飛鳥・奈良の時代から遡及して便宜的に安曇の名が付与されたと考えてよいだろう。つまり安曇連の祖先だから「安曇族」と仮に呼んで置こうというのである。

時代は下るが、太田氏においては労作『姓氏家系大辞

典』(昭和17～18年)に著名である。これを含めこの時期の著作では不思議なことに「安曇族」ではなく「安曇氏」だけを用いている。奴国時代においても「安曇氏」の呼称だけが用いられ、その一方で「安曇氏=奴国王」との推断は影を潜めている。ただ一箇所だけ『姓氏家系大辞典』の中で信濃の安曇氏についてのみ「安曇族」と表記された部分がある。これは時期的(昭和17年)に見て宮地氏の「信濃安曇族」の性格付けに習ったものと思われ、いわば逆輸入である。さてそれではいつまで「安曇族」の呼称が積極的に使われていたのだろうか。

大正13年刊『日本国誌資料叢書』『信濃』の中に「安曇族」の小見出しが、大正15年刊『諏訪神社史』に「八坂刀売命は信濃安曇族の方」との記述が見える。しかし昭和3年刊『日本古代史新研究』昭和4年刊『日本上代に於ける社会組織の研究』ではそのすべてが「安曇氏」となっており、「安曇族」の語は見えない。それ以後も太田氏はなぜか「安曇族」の名称をほとんど使っていないのである。強弁する必要がなくなったからなのか、あるいは何らかの理由により放棄されたのか。一方、宮地氏が「安曇族」の概念を使い始めるのは昭和6年、ちょうどこの時期に当たっている。このことは単なる偶然と見做してよいのであろうか。

ともあれ『日本古代氏族制度』で示された「安曇族」の概念既定、および性格付け、そしてその後の経過はそれが新造語である可能性を強く示唆している。すなわち、「安曇族」という存在そのものが、このとき初めて創作された可能性が高いと思われるのである。

太田亮氏の「安曇族」「酋長時代の安曇氏」について

太田亮氏における「安曇族」概念、同じ意味で用いられた昭和三年以降の「酋長時代の安曇氏」についてさらに概要を整理しておきたい。

太田氏の「安曇族」概念は氏が酋長時代と呼ぶ弥生時代まで遡り、北九州の一角志賀島に海神を祀る奴国王にそのルーツを求める。この地はかつて儺縣と呼ばれ、国郡制が敷かれてからは筑前国糟屋郡阿雲郷(阿曇郷)が置かれていた。「安曇族」はこの後安倍氏系の筑紫国造(筑紫君)にこの地を譲り、自らは阿波国名方郡に本拠を求め遷居したという。(名方は儺縣に由来、とする)時同じくして一派は信濃へ、もう一派は壱岐・対馬へ移動し拠点を築いたとしている。

この他にも安曇氏の海部は各地に植民したが、在地の豪族に奪われ、安曇氏に所属する海部は信濃の海部だけになった。安曇族が信濃に移動した形跡は、安曇郡や海部郷などの地名、穂高神社や氷鉋斗女神社、玉依比売命神社など海神系神社の存在より遡って推測することができるとする。また、諏訪社の妃神八坂刀売命は信濃安曇族の出身と伝えられ、建御名方命の「名方」は阿波国名方郡に由来する故「安曇族」は諏訪社の建神にも深く関わったとしている。諏訪社と安曇族の関わりについては、川会神社社伝や信府統記旧俗伝の泉小太郎伝説を引いて説明に加えている。

太田氏にあっては「安曇族」の誕生、遷移、定着、そのすべてにおいて遡及的推測に頼っており、その時間幅も500年～1000年という長大なもので信憑性は極めて低いと言わざるをえない。そして、『穂高神社史』において宮地氏の行った「安曇族」の定義づけにも、太田氏の影響が深く感じられ、「安曇族」概念への疑いはいよいよ濃くなってきた。

「信濃安曇族」の誕生

太田氏による「安曇族」概念の発表から十数年、それは宮地直一博士の知るところとなる。そして、この用語が新たな想定の下、再利用される時がやって来た。

昭和６年発刊『諏訪史』第2巻。諏訪社建神に絡み、「安曇族」がこれに関与した旨、および諏訪神族の信濃定着に先立ち、すでに安曇系海部族「安曇族」が信濃に定着していたという推断を披瀝している。こうした考えの元になったのは言うまでもなく太田氏の『諏訪神社史』(大正15)であろう。重要部分に太田氏の考えを踏襲する部分が散見されるからである。

それにしても何故諏訪神族に先立ち安曇族が信濃に定着していたとする必要があったのだろうか。

『諏訪史』では「(諏訪)建神以前海部族により(安曇野)は開拓されていた」という樋畑雪湖氏の説を引いたり、「最初の開拓者は海部系部族で彼らが移住を始めたのは遥か古代に属し、恐らくは先着のアイヌ族と接触する位の古さに遡る」という俗説を紹介しているが、その実なんら物証があるわけでもない。事によると「安曇郡」が信濃に置郡されたこと、穂高神社や氷鉋斗女神社などが存在することなどから遡及し、その古さを強調する太田氏の「安曇族」概念をさらに遡らせて利用しようと試みたのかもしれない。

『穂高神社史』第二章にもこのような一文がある。「奈良時代の昔において氏族名を負う一郡の設置されるまでには長期の準備を要し、久しい以前より郡内に勢力が養われてゐたとしなければならない。随ってその起源を上代も古い時期にかくべきは当然で、一方隣郡諏訪に拠った諏訪神族との関係に徴しても、----中略----安曇野の最初の開拓者として、他に先んじて定住し得られた古代に置かねばなるまい。」

その一方、安曇野の弥生式遺跡の少ないこと貧弱であることについては、安曇族の主力は松本にいたと推測し、穂高古墳群の規模の小さいこと時代の新しいことに関しては、水葬やその他特殊な方法で埋葬されたとの推断を下している。

何故これほど安曇族信濃入りの古さに拘り、これを誇張しようと執心するのか。その真意は測りかねるが、安曇族信濃入りの古さを証明することは、少なくとも九州安曇族の古さも間接的に証明することになるので、さら

に姻族である皇室の古来悠遠さを誇張することにもなりえそうである。

実証史学を志したとされる宮地博士だが、一方で国学者にも師事して、その信仰心は篤いものであったという。信濃安曇族誕生に絡んでは太田氏が筋書きし、宮地氏が生を吹き込んだと言ってもよいだろう。その動機は何であったのか。信仰心からなのか、それとも官僚としての義務感からなのか。

欠史八代と安曇族

古事記、日本書紀において事績の存在しない系譜のみの第二代から第九代までの八人の天皇(　綏靖　安寧　懿徳　孝昭　孝安　孝霊　孝元　開化　)を欠史八代という。現在の歴史学ではこれらの天皇は存在せず、後世になって創作された存在と考えられている。こうした考えを初めて提唱した津田左右吉は不敬罪に問われ1942年有罪判決を受けている。墳墓も厳密に比定できないこれら天皇の時代こそまさに弥生文化の時代なのである。

明治政府は、明治５年(1872)神武天皇の即位した年を記紀の記載や辛酉思想の影響などから西暦B.C660年と定め、その年を皇紀元年とした。そのため欠史八代の天皇を含め初期天皇の統治時代が弥生時代から古墳時代草創期に重なることとなったのである。

政府はこれら天皇の実在性を高めるための様々な研究を期待したであろう。弥生期の天皇の実在性を高めることはできずとも、大和政権を支えた古参の氏族の存在とその活動史を明らかにすることで大和政権のこの時代への間接的な関与を仄めかすことはできよう。奈良時代には阿雲郷(阿曇郷)が弥生文化の先進地北九州に置かれていたことから、安曇氏に白羽の矢が立ったことは容易に想像できる。ただし「安曇族」の存在年代をB.C660年より古い時代まで遡らせてしまうと新たな矛盾を産む恐れがあるため、神武即位ころが上限である。

敗戦と「安曇族」幻想の拡大

太田亮氏によって考案され、宮地氏によって新たな存在価値を与えられ、大場氏によって概念補強された「安曇族」は戦前すでに史学タームとして確立されていた。しかし敗戦により決定的な変節を経験することとなる。

『穂高神社史』においては皇国史観や儒教思想を引きずった表現、弥生時代への過度の拘りも見えたが、戦後民主主義と古代史ブームが到来すると「安曇族」概念も戦前のイメージを払拭し、考古学の一角を占めるようになった。これを最も歓迎したのは地方史・郷土史の研究者であろう。発掘によって遺物は出るが、これを作った人々の生活ぶりは見えてこないからだ。地域を繋ぎ、古代史の空隙を埋め合わせてくれる「安曇族」はまさに古代史のヒーローとなった。そしてその概念は一人歩きを始め、活躍する領域を徐々に広げて行ったように思える。

当初、「海神族」は「安曇族」のみであったが、太田氏自身や宮地氏・大場氏により白水郎や海部族と混同されるに至り、尾張連や海部直の海部(あまべ)、倭直や青海首、倭太氏の海部(あまべ)、磯部氏などとも混同され、近年ではその他すべての海人や海民、海夫と観念的に融合されて話題に上ることが多くなってきた。それどころかさらに時代を遡り、邪馬台国時代の海人や稲を携え中国大陸からやってきた最初の弥生人までもが「安曇族」の文脈で語られるようになっている。固有名詞だった「安曇族」が海部族と同じ一般名詞に近い使われ方をされるようになったことは大きな変化である。

そもそも「安曇族」という概念には背景となる国家観も階級分化も人口論さえも存在していない。だからこそ明治の国家神道下で都合よく利用され得たのだといえる。この使い勝手の良さが戦後の歴史解釈においても利用されるきっかけとなったのは言うまでもない。

戦前の、神話=史実と捉える国家神道の文脈から解放されると、新たな古代史観の下、無辺・無時間の「安曇族」が誕生することとなる。今や考古学や地方史においても、さらに民俗学や人類学においてさえ大活躍の「安曇族」は、デジタル技術や情報通信の発達に伴い拡大拡張を続けている。そこから生み出される幻想は古代史ロマンなどと呼ばれ観光資源として大いに利用されるようにもなっている。宮地博士が現代に生きて居られたら、果たしてどのような感想を漏らされるのであろうか。

新たなる課題

昨今、特にこの10年くらいの間、コンピューターの性能向上とAI開発にも助けられてゲノム技術が飛躍的に向上している。以前ならミトコンドリアDNAの解析で精一杯だったのが、核DNAの解析まで可能となり、X染色体や女系の集団遺伝に加えY染色体と男系の集団遺伝についても調査が始まっている。これによって大陸と縄文人・弥生人・現代日本人の関係も徐々に明らかになりつつある。「安曇族」の研究から時間軸をなくそうとする試みが始まったこととゲノム技術の発展とは無関係ではない。ならばもう一歩進めて「安曇族」という観念に縛られず、日本人のルーツ論に合流してしまったほうがより生産的な結果が得られるであろう。

その一方、安曇氏や安曇部が衰退した平安時代以降も、彼らの流れを汲むと思われる人々が、朝廷の儀式や貢納関係において、あるいは朝廷や幕府と独立した形で水軍・海人・海夫・海民として、その文化を後々の世代にまで継承し続けている事例が報告されている。安曇氏が歴史から消え去った後も、近江や難波を中心に内膳司御厨はさらに発展し、源氏と結びつきを深める中で徐々に独立性を高め、戦国期には水軍を率いて時の政権にも多大な影響を与えている。

江戸期には不幸にも身分制度のさらに外に置かれ、あるいは囲い込まれて、過酷な差別にさらされている。喜田貞吉博士は「海人への賤視」の起源を古代に求める。

しかしこれを受け継ぐ研究や近世近代の民衆史を安曇氏族の視点から捉えこむような研究は現代に至るまでほとんどなされていない。

そして信濃においては、「安曇族」論者の期待に反し、古代の安曇野開発は近隣地域に比べ遅れをとっていたことが遺跡の発掘状況より明らかになっている。安曇郡設置の理由を「安曇族」に帰すことができないのであれば新たな理由を探さなくてはならない。

「安曇族」の夢から醒めたら課題が山積みである。

宮地直一氏　略歴

明治19（1886）　高知県高知市出身
明治41（1908）　東京帝国大学卒業、大学院進学
明治42（1909）　内務省入省（神社考証担当）
大正１（1912）　神社調査委員
大正４（1915）　明治神宮造営局参事
大正７（1918）　東京帝国大学文科大学講師（神祇史）
大正８（1919）　史蹟名勝天然紀念物調査会考査員、神社局考証官
大正11（1922）　國學院大學教授（神祇史）
大正13（1924）　神社局考証課長
昭和４（1929）　神社制度調査会幹事
台湾総督府神社行政事務嘱託
昭和10（1935）　紀元二千六百年祝典準備委員会嘱託
昭和13（1938）　東京帝国大学神道研究室主任教授（神道講座）
昭和15（1940）　勲三等瑞宝章
昭和16（1941）　正四位
昭和21（1946）　東京帝国大学退官、神社本庁顧問、国民信仰研究所創設（所長）
昭和24（1949）　調査先の長野県穂高にて急逝する

氏族名が起源と推測される郡名

（和名抄郡郷編より）

(大和国) 葛上郡 葛下郡 平群郡 忍海郡 山辺郡
(山城国) 紀伊郡 (河内国) 錦織郡 茨田郡 丹比郡
(摂津国) 百済郡 (伊賀国) 阿拝郡 (伊勢国)渡会郡
員弁郡 (紀伊国) 海部郡 (尾張国) 海部郡
(三河国)賀茂郡 額田郡 渥美郡 (駿河国) 安倍郡
(伊豆国) 賀茂郡 (武蔵国) 比企郡 高麗郡
(上総国) 山辺郡 (下野国) 安蘇郡 (安房国) 平群郡
(近江国) 犬上郡 (美濃国) 賀茂郡 厚見郡
(信濃国) 安曇郡 (佐渡国) 賀茂郡 (陸奥国) 安積郡
(伯耆国) 久米郡(出雲国) 意宇郡 (隠岐国) 海部郡
(播磨国) 賀茂郡 (美作国) 久米郡
(備前国) 藤原郡 和気郡 (安芸国) 賀茂郡 佐伯郡
(伊予国) 越智郡 和気郡 久米郡 (筑前国) 宗像郡
(肥後国) 阿蘇郡 (豊後国) 海部郡 (薩摩国) 日置郡

大場磐雄氏　略歴

明治32（1899）　東京市生まれ
大正11（1922）　國學院大學卒業・神奈川県立第二横浜中学校着任
大正14（1925）　内務省神社局考証課嘱託となる（課長宮地直一）
昭和10（1935）　國學院大學学部講師
昭和12（1937）「子持勾玉私考」
昭和16（1942）「玉依比売命神社の児玉石」
昭和23（1948）　学位取得（「祭祀遺蹟の研究」）
昭和24（1949）　國學院大學教授就任
「信濃国安曇族の考古学的一考察」
昭和41（1966）　國學院大學に考古学専攻を設置。
昭和45（1970）　定年・大学院客員教授、日本考古学協会委員長
昭和50（1975）　著作集刊行開始、逝去。
『考古学上から見た古氏族の研究』

太田亮氏　略歴

大阪府吉野郡下市村（現・奈良県吉野郡下市町）に生まれる。京都法政大学予科（現・立命館大学）を経て、明治43（1910）　神宮皇學館（現・皇學館大学）卒業。山梨県立女学校教諭、内務省考証官補、同嘱託などを経て、
昭和 9（1934）　立命館大学講師
昭和15（1941）　同教授。文学部長を兼ねた。
昭和20（1945）「日本上代ニ於ケル社会組織ノ研究」
昭和24（1949）　近畿大学教授。
昭和30（1955）　専修大学教授。講義の帰途に突然路傍で倒れ、心臓動脈硬化症のため死去。

参考資料・文献　年譜

明治40年(1907)　吉田東伍「大日本地名辞典」
大正 6年(1917)　太田亮「日本古代氏族制度」
大正13年(1924)　太田亮「日本国誌資料叢書・信濃」
大正15年(1926)　太田亮「諏訪神社史」
昭和 3年(1928)　太田亮「日本古代史新研究」
昭和 4年(1929)　太田亮「上代に於ける社会組織の研究」
昭和 4年(1929)　太田亮「氏神の発達」（「神道講座」所収）
昭和 6年(1931)　宮地直一「諏訪史」第二巻
昭和16年(1941)　大場磐雄「玉依比売命神社の児玉石」
昭和18年(1943)　太田亮「姓氏家系大辞典」
昭和24年(1949)　宮地直一「穂高神社史」（「安曇族文化の信仰的象徴」改題）
昭和24年(1949)　大場磐雄「信濃国安曇族の考古学的一考察」（「信濃」所収）
平成22年(2010)　中村耕作「『古代学』としての考古学『神道史』としての考古学」（國學院大學「研究開発機構紀要」第二号所収）

歴史は変わる！（その5）　池田義光

かつて私たちが知っていた歴史的出来事や考察が、新しい史料や遺物などの発見や研究の進展によって変わり、それによって教科書が書き換えられるということは多々ある。

今回は中世史の中から「教科書が書き換えられた事例」をいくつか紹介する。

1　武士とはなにか？　武士のおこりはいつか？

［従来の説］かつては、『地方の治安が乱れた平安時代の中ごろに、有力農民や豪族が自らの土地を守るために自分と一族・郎党らを武装させたのが武士のおこりで、「武士」とは、自力救済のために武装した土地経営者＝領主であり、武士の間には封建制度があって、武士とは封建領主である。』という≪領主制的武士論≫がとられていた。

［現在の説］現在では、『武士の本質は「戦士」であり、高い武芸を保持し、それを代々に渡り継承している者たちが武士であると考え、もともと朝廷に武芸をもって仕える武官が武士の起こりである。』とする≪職能的武士論≫が有力になってきた。

［高校教科書：山川出版『詳説　日本史Ｂ』］　武士とは、もともと朝廷に武芸をもって仕える武官である。９世紀末から10世紀に地方で土着した国司の子孫や地方豪族が武装したり、押領使・追捕使に任じられた中下級貴族でそのまま在庁官人などになって現地に残ったものの中から、有力な武士(つわもの兵）となるものが現れた。11世紀になると、開発領主たちは私領の拡大と保護を求めて、土着した貴族に従属してその郎党となったり、在庁官人になったりしてみずからの勢力をのばし、地方の武士団として成長していった。

2　中世とは？　中世の始まりはいつか？

［従来の説］「中世」というのは西欧史学から発生した用語で、西欧では中世＝封建社会と言われるが、日本では封建制の担い手は武士(封建領主)であったという考え方から、中世封建社会の起点は、武士の最初の本格的政権である鎌倉幕府の成立期であるとの考えが一般的であった。

［現在の説］現在では、「中世」の武士の権力はまだまだ限定的であり、「中世」は従来の貴族(公家）・寺社・武士の三つの権門(政治・社会勢力）が三つ巴で互いに勢力争いをし、次第に武士が優勢になっていく時代と捉える≪権門体制論≫が有力になっている。院政の開始期に、従来の貴族勢力に加え、強訴を増大させた寺社勢力の台頭とそれに対抗する武士勢力の台頭があったので、院政の開始期または後三条天皇の即位(藤原氏の摂関政治の終焉）期を中世の始まりと考えるようになった。「権門体制論」では、「中世」が封建社会かどうかにあまり注目しない。

［高校教科書：山川出版『詳説　日本史Ｂ』］　後三条天皇の即位と院政の開始期を中世の始まりと考える。

［中学教科書：東京書籍『新編新しい社会　歴史』と教育出版『中学社会　歴史』］　10世紀に都や地方では武士が成長し始めたと考える。

3　鎌倉幕府の成立年は、イイクニか？イイハコか？

これは「幕府」の意味を重視するか実質を重視するか、「鎌倉幕府(政権)」をどうとらえるか、で考え方が異なる。しかも「鎌倉幕府(政権)」は実際には徐々に実現・成立したものであり、それがあえて何年成立かを言うのは、一つの目安に過ぎないという問題がある。

［従来の説］従来は「幕府」が「征夷大将軍の陣営」を意味するという形式面に着目し、「源頼朝が征夷大将軍に任命された 1192 年に鎌倉幕府が成立した」と考えるのが定説だった。

［現在の説］「鎌倉幕府(政権)が実質的にいつ成立したか」を考えて、諸説に別れる。多数説は1185年説だが、それで確定したわけではない。「鎌倉幕府」の性格を、①「東国を中心にした武士の半独立政権」とみれば、1180年：源頼朝が挙兵し南関東に軍事政権が成立した年、 1183年：頼朝が東国の荘園と国衙領に対する支配権を朝廷から認められた年、 ②「日本全体の軍事警察力を基盤にした武士政権」とみれば、1185年：後白河法皇に守護・地頭の設置を認められた年、 1190年：頼朝が右近衛大将に任命された年、1192年：源頼朝が征夷大将軍に任命された年、の諸説がある。

［高校教科書：　山川出版『詳説　日本史Ｂ』］

(1)「源平の争乱」と題した年表中で、「＊印は幕府設立関係」として、1180年・1183年・1184年・1185年・1192年の出来事をあげ、鎌倉幕府の成立は段階的であることを示している。

(2)一方、本文では、1185年を取り上げ『こうして東国を中心にした頼朝の支配権は、西国にもおよび、武家政権としての鎌倉幕府が確立した。』と述べ、鎌倉幕府の成立（確立）を1185年とする。

4　「武家造」とは言わなくなった

［従来の説］鎌倉時代などの武士の屋敷を、貴族の屋敷の「寝殿造」と区別して「武家造」と呼んだ。

［現在の説］鎌倉時代などの武士の屋敷は、貴族の屋敷の様式である「寝殿造」のバリエーションの一つであり、武士独自の様式ではないというのが、現在の建築史の通説であり、「武家造」という用語は用いないようになっ

た。但し、室町時代の「慈照寺東求堂同仁斎」などの造りを「書院造」と呼ぶのは変わらない。

［高校教科書：山川出版『詳説　日本史Ｂ』］≪武士の生活≫ の項に、「開発領主の館」というタイトルでの想像絵（『一遍上人絵伝』などの絵巻物に見える武士の館や、考古学の発掘調査をもとに復元したもの）を載せて、「武家造」という用語は用いていない。

［中学教科書：東京書籍『新編新しい社会　歴史』と教育出版『中学社会　歴史』］「武士の館」という題で、『一遍聖絵＝一遍上人絵伝』　神奈川県清浄光寺（遊行寺）蔵の絵を掲載しているだけ。

5　文永の役での元軍退却理由が変わった

［従来の説］かつては蒙古襲来（元寇）では文永の役と弘安の役の二度とも「台風」を主たる要因として元軍が退却したという考えが強かった。

［現在の説］研究が進んだ結果、二度の蒙古襲来（元寇）における元軍退却理由に、鎌倉武士の奮闘や元軍の事情を考慮する説が有力になった。さらに「文永の役」は太陽暦の11月下旬であって、台風ではなくこの時期の低気圧で嵐が起こったとする説が有力になってきた。さらに「文永の役」ではそもそも暴風雨はなかったという説や、暴風雨があったとしても主たる退却理由は別であるという説もある。

［高校教科書：山川出版『詳説　日本史Ｂ』］『元は高麗の軍勢もあわせた約３万の兵で、1274（文永11）年、対馬・壱岐を攻め、大挙して九州北部の博多湾に上陸した。幕府は、九州地方に所領を持つ御家人を動員して、これを迎え撃ったが、元軍の集団戦法やすぐれた兵器に対し、一騎打ちを主とする日本軍は苦戦におちいった。しかし元軍も損害が大きく、内部の対立などもあって退いた（文永の役）。』と、暴風雨を元軍退却の原因にあげていない。

6「倭寇」は日本人の侵略か？

［従来の説］13世紀から16世紀にかけて、九州や瀬戸内の武士や漁民の中に、朝鮮半島や中国大陸に渡って海賊を働いたりする者が現れた。現地では、これを「倭寇」と呼んで恐れた。

［現在の説］「倭寇」には、「前期倭寇」から日本人以外に朝鮮人や中国人などもいたし、16世紀に活動した「後期倭寇」には中国人が多かった、という説が有力になっている。

［高校教科書：山川出版『詳説　日本史Ｂ』］『後期倭寇には、中国人などの密貿易者も多かった。』さらに「倭寇の図」の説明文として『後期倭寇の様子を描いたものである。後期倭寇の大部分は中国人であるが、～』

［中学教科書：東京書籍『新編新しい社会　歴史』］『倭寇の中には、朝鮮人や中国人など、日本人以外の人びとも多くいました。』

2019年度 実施事業レポート　八ヶ岳山麓縄文時代の旅」　11月10日（日）

八ヶ岳の周辺山麓には、縄文のビーナスで知られる尖石遺跡や井戸尻遺跡など、縄文時代の遺跡が数多くありますが、長野県側にある著名な遺跡には会員のほとんどの方が訪れたことがあるということなので、今回は信州側からは八ヶ岳の裏側に当たる北杜市と北相木村まで脚を伸ばすことにしました。

北杜市では「安曇」と書かれた墨書土器を展示している考古資料館と縄文時代の後期から晩期にかけて祭祀を行った場所とされる金生遺跡とを見学する予定でした。しかし、展示物の圧倒的な数量と学芸員の渡辺さんの熱のこもった説明に加えて会員からの質問の多さに予定時間をオーバーしてしまい、金生遺跡はバスの車窓からの見学となりました。

北相木村では「信州の縄文時代が実はすごかった」という本の著者・藤森英二さんから日本初の災害事故で知られる「栃原岩陰遺跡」の発掘調査にまつわる話を発掘資料を前にして興味深くお聞きできました。

台風19号の爪痕を所々に眺めながらの八ヶ岳山麓を一周する慌ただしいバス旅行でしたが、信州の縄文遺跡の素晴らしさを実感できる研修旅行になったと思います。

北杜市考古資料館

安曇野歴史サロン

2019度の主要事業として昨年4月以来、安曇野歴史サロンを毎月開催してきました。11回累計で781名の参加がありました。想定以上の参加者のため配布資料の数が不足してご迷惑を掛けた月も何回かありましたが、新たな会員ができました。今年度も継続して開催していきますが、シンポジウムをはじめ、講演会をフォローアップする勉強会も企画運営委員会にて計画中です。

4月21日「安曇氏族の興亡」講師：金井恂氏
5月25日「安曇氏と仁科一族の盛衰」講師：丸山楽雲氏
6月22日「邪馬台国と九州王朝の謎」講師：鈴岡潤一氏
7月27日「安曇族研究史 序説」講師：古川幸男氏
8月24日「安曇族・サ・エ・ラ」講師：平林厚美氏
9月21日「仏教伝来と明科廃寺」講師：大澤慶哲氏
10月26日「日本史のここが変わった」講師：池田義光氏
11月23日「安曇野の古墳時代」講師：山下泰永氏
12月14日「五千年前の安曇野」講師：百瀬新治氏
1月19日「歴史と小説と」講師：遠藤武文氏
2月23日「古代の名ブランド梓弓」講師：岩淵軍平氏
＊3月開催予定の「神道の歴史と穂高神社」は新型ウイルス感染予防のため延期としました。

古墳の整備　11月6日（水）

昨年度から実施してる古墳整備、今回は上原古墳の除草作業を行いました。穂高古墳群には、現在約80基の古墳時代後期の横穴式石室をもつ円墳が確認されていますが、この古墳は最も標高の低い場所に位置し、しかも群から離れた単独の古墳で、金メッキを施した馬具、直刀、金環等の副葬品から、土地の有力者のものと考えられています。当会のメンバー10名程が参加して草刈りを行い、およそ２時間ほどで作業を終了しました。埋もれた遺跡を掘り出したような達成感を味わうことができました。

編　集　後　記

春といえば桜、「サクラサク」で希望の季節の象徴でもある。国会の桜はどうなってしまったのだろう。新型肺炎で幕引きとなり、またも闇の彼方へ葬られたようでもある。そもそも会の趣旨は個人の後援会員を募集して迄行うものではないはずである。苦しい答弁を見ても、とても一国の宰相が行うものではない。大江戸の金さんの桜吹雪が舞うことはないだろうか。

それはさておき今号は増ページで「安曇族論」を考察していただいた。

県立歴史館の笹本正治館長は言ったそうである。「歴史を知ろうとしたら、書かれていることは真実なのか、その後ろに何があるのか、それをきちんと解き明かして、時代の中に位置づけなければいけません。それを通じて、次の時代をどう作っていきたいかまで持っていくことが、学問として有効性を持つことでしょう。歴史学は、未来をつくる学問です」。これは古文書等史料を研究する人達に語ったことだそうであるが、我々にも相通ずるものがあると思う。我々の場合は原典に当たることは殆どなく、発表された学説や、考古学的史料、研究書等を学習するいわば二次研究者とでもいうべき立場である。だが歴史の真実を知ろうとする気持ちに違いはない。

「安曇族論」は多くの学者、研究者が関わってきたが、未だ納得できる論は出ていないようである。宮地直一、大場磐雄、太田亮の大家をもってしても、「実証研究と国家神道」、「科学と神話」という両立し難い領域を学問的に融合することは想像を絶する困難さがあったことであろうという。安曇族論以外にも我々の前には古代史の解明されなければならない課題が沢山存在する。志賀島金印、邪馬台国、天孫降臨、出雲の国譲り、九州王朝説等々である。安曇族論はこれら諸課題とともに考察されるべきで一人歩きは許されない。歴史の闇は深いが、人間が生活していたことは紛れもない事実であり、我々はこれから人間の歴史としての古代史を学んでいかなければならないと思う。やや堅苦しい内容となってしまったかもしれないが、とにかく楽しく一歩でも謎の解明に近づければと思う。（本郷）